

日本の炭鉱映画史と三池

——『三池 終わらない炭^{やま}鉱の物語』への応答——

友田義行

はじめに

「燃える石」は、製鉄工業を飛躍的に発展させ、巨大な船舶や鉄道を動かし、人々の暮らしを一変させた。明治維新以後、日本でも莫大な量の石炭が産出された。それはまた、日本の資本主義化と軍国主義化を押し進める熱源でもあった。三井・三菱をはじめとする財閥の基礎を成した富も、兵器の大量製造を可能にしたエネルギーも、日本最大の火床・筑豊の地底から吸い上げられたのである。だが、帝国主義戦争の中で膨張し、戦後復興を推進してきた石炭鉱業は、朝鮮戦争特需の後に急激な衰退を始める。石炭から石油への転換を表す「エネルギー革命」という言葉は新時代の幕開けを予感させ、石炭産業の衰退は歴史的宿命と捉えられていった。1963年にスタートした石炭政策によって炭鉱は次々と閉山し、1997年には三池炭鉱も坑口を閉じることとなった。

炭鉱の歴史には、影がつきまとう。衰退産業であるというだけではない。筑豊をはじめとした炭鉱には、近代史の傷跡が刻み込まれている。現代のメディアにおいて「坑夫」という言葉が放送自粛用語に指定されたことにも影を落としているように¹⁾、炭鉱は時代と社会から不当にも排除された民衆たちが流れ込んだ場でもあった。土地を追われ、職を奪われた漁労民、労働者、部落民、囚人、朝鮮人、俘虜、引揚者、復員兵士、戦災市民……様々な人々が坑内になだれ落ち、過酷な環境下で労働に従事した。囚人労働や強制連行といった、「国民の歴史」にとって都合の悪い事実がそこにはある。敗戦後には、炭鉱は大規模な労働争議の舞台となった。英雄的な闘争の一方で、長引く争議はコミュニティの断絶をもたらした。落盤や炭塵爆発事故は後を絶たず、塵肺病やCO中毒症は今も炭鉱労働者を苦しめ続けている。近代日本史の矛盾を凝縮したような数々の記憶は、炭鉱を色濃く覆っている。

しかし、時に「負の遺産」とも称される炭鉱の歴史は、日本が歩んできた道そのものでもある。それを消し去るのは、日本の歴史を消し去ることに等しい。閉山とともに、そこで働いた無数の人たちが生きて来た道や姿まで消してしまっているのか——映画『三池 終わらない炭鉱の物語』の熊谷博子監督（ご本人は演出を意味するこの肩書きを拒否し、「映像ジャーナリスト」という言葉を使われる）はそう問いかける。三池炭鉱が閉山した翌1998年から構想され、2001年より撮影が開始されたこの作品は、熊谷監督が地元市民や行政の協力を得て作り上げた長編ドキュメンタリーである。「閉山を契機にすべて忘れて前進すべき」との“声”を一方に聴きながら、訪れた炭鉱跡で監督はもう一つの“声”を聴く。それは、かつて地底で働いた人々の“声”であった。

炭鉱は、忘却にあらがうかのように今も強力な“場の力”を内包し続けている。映像作家・文

学者・写真家ら様々な表現者がその磁力に引き寄せられて創作を行い、それがまた多くの人々を引きつけてきた²⁾。しかし一方、近年の“廃墟ブーム”に顕著のように、炭鉱は不気味で空虚な異空間として消費されつつある。そこには“声”を聴く契機が欠落している。『三池 終わらない炭鉱の物語』をはじめとした映画や文学は、炭鉱をどのように記録し、描き、捉え／損ない、新しい生命を吹き込んできたのだろうか。主に戦後期から現代にかけての「炭鉱映画」から考察する。

1. 「炭鉱映画史」の試み

『三池 終わらない炭鉱の物語』（以下、『三池』と略称する）のパンフレットに掲載されたインタビューで³⁾、熊谷監督は『三池』の撮影まで炭鉱のことをほとんど知らずにいたことを率直に語っている。現在、炭鉱や石炭を身近に感じる機会はきわめて限定的なものではないだろうか。しかし、にも関わらず我々は日常的に石炭の恩恵を受けている。たとえば映画の上映にも欠かすことの出来ない“電気”もそうである。現在でも我々が昼間に使う電力量の過半数は火力発電から得られており、その半分近くは石炭の燃焼によるものである⁴⁾。鉄鉱石を精錬して鉄を作る過程で用いられるコークスや、紙・パルプ製造などに使われるボイラ燃料、セメント製造原料の灰などは、すべて石炭から得られるものである。また、靴下のナイロン繊維や、マニキュア、口紅といった日用品も、石炭の化学処理を通して作られたものである。しかし、家庭で馴染みであった石炭ストーブや火鉢といった暖房具が電化製品に変えられていく今日、ふだんの生活で石炭や練炭を使う機会は次第に失われ、ましてその石がどのように生産されているかは不可視化されていると言える。

だが、「炭鉱」を知らず、石炭を目にしない日常を送りながらも、我々は炭坑に何らかの——ある固定化された——イメージを抱いているのではないだろうか。そのイメージ形成に大きく関わっているものとして、映像が挙げられるだろう。映画をはじめとした映像作品は、炭鉱を、またそこで生きて働いた人々を、どのように描いてきただろうか。（論文の末尾に添付した年表・作品リストは、こうした素朴で途方もない問いから出発して作成し始めたものである。）

論題にも掲げたこの「炭鉱映画」という言葉は、決して一般的な映画用語ではない。「戦争映画」や「ミュージカル映画」といったジャンル映画の系譜に、「炭鉱映画」という領域は存在しない。代表的な映画・映像関連の辞典類の見出しにも、この言葉は見あたらない⁵⁾。大衆映画誌でよく見かけるような、「青春映画」「芸芸映画」といったジャンル分けと比較しても、あまりにマイナーなくくりであることは確かである。しかし現状として、この言葉は確実に流通を始めている。試みにインターネットの検索サイト Google で「炭鉱映画」というキーワードを打ち込んでみると、約 500 件の検索結果が表示される⁶⁾。その中には『三池』を始めとしたドキュメンタリーだけでなく、フィクション（劇映画）を含む記事も見受けられる。たとえば、2006 年に大ヒットを収めた劇映画『フラガール』（李相日監督）。昭和 40 年、プロのダンサーと町の人々が力を合わせ、閉山の危機に陥った福島県の炭鉱町を、フラダンスを目玉にしたレジャー施設で活性化させるというストーリーである。こうした物語は、イギリス映画『リトル・ダンサー』（ステイヴン・ダルドリー監督、2000 年）や、『フル・モンティ』（ピーター・カッター監督、1997 年）、

さらに『プラス！』（マーク・ハーマン監督、1996年）といった作品を連想させる。多少乱暴にくくるならば、いずれも踊りや音楽で、衰退した炭坑の町を元気づける内容である。「炭鉱映画」という言葉は、映画祭や特集上映でも用いられてきたが、その際にもこの4作品のうちの何本かが、ドキュメンタリー映画と並んでしばしば同時に紹介されている。ここ10年あまりの期間で、邦画・洋画の枠を越えて、炭鉱や炭坑町が舞台であるという共通点を持つ印象深い映画が上映され、それぞれをまとめて観るといふ観賞のあり方が広がっていることが伺える。

「炭鉱映画」というくくりを仮に設けてみると、このほかにも様々な作品が想起されるだろう。たとえば、毎年のように繰り返しテレビ放映されるアニメ映画『天空の城ラピュタ』（宮崎駿監督、1986年）では、少年が働く炭坑へ天空から少女が舞い降りる。彼らを海賊の手から守るたくましい坑夫たち、トロッコや蒸気機関車での滑走など、国籍不明のファンタジーではありながら、炭鉱という舞台が物語を駆動させる重要な役割を担っている。宮崎駿はこの映画の製作に先立って、イギリスのウェールズヘロケハンに出かけているが、この街は『わが谷は緑なりき』（ジョン・フォード監督、1941年）の舞台でもある⁷⁾。あるいは、『幸せの黄色いハンカチ』（山田洋次監督、1977年）。ハンカチがたなびく北海道の炭坑住宅は、大衆の記憶の中で繰り返し言及される光景である。一風変わった炭鉱映画として、『空の大怪獣ラドン』（本多猪四郎・円谷英二監督、1956年）も挙げられるだろう。炭鉱のなかに隠れていた古代生物の卵が、核実験の影響で孵化し、炭鉱の町を襲うという物語である。一見すると荒唐無稽な怪獣映画だが、実は炭鉱という地下労働の危険性を象徴的に表現している。たとえば、炭鉱の奥底から現れて坑夫を襲うラドンは、落盤を伴って登場する。そして、その姿を見た坑夫は、気を失ったのち、目覚めたときには心神喪失の状態に陥っている。坑道の奥深く、突如として襲いかかってくる落盤事故や爆発事故、一酸化炭素中毒の症状といった、様々な現実の反映を読み取ることが可能である。大衆娯楽文化のなかに、炭鉱での営みはたしかに息づいている。

次節から、戦後に発表された日本映画を中心に、いくつかの作品を取り上げて考察する。まず、50年代以降の炭鉱映画の流れを駆け足で概観する。そして、映像に表れる身体と物体の運動にも着目して、炭坑が遠景に追いやられていく様子を検証し、そうした傾向に対抗する映画として『三池』の位置づけを試みる。その上で、炭坑からの声を聞こうとする『三池』と同じ姿勢で作られながら、別の声を聞き取った、ある劇映画を取り上げたい。

2. 劇映画における炭鉱表象—地底から空へ—

敗戦後、日本の全国出炭量は、戦前のピーク期に比べて10分の1にまで激減する。しかし、石炭・鉄鋼を重点的に増産する傾斜生産方式の採用や、朝鮮戦争による特需により、1955年前後には戦前並みの水準にまで回復する。そして、朝鮮戦争が停戦したのちに、石炭産業は大不況に見舞われ、あとは衰退の一途を辿ることになる。

この時期の日本映画では、たとえば『女ひとり大地に行く』（亀井文夫監督、1953年）、『にあんちゃん』（今村昌平監督、1959年）などが、炭鉱映画の代表として挙げられるだろう。『女ひとり大地に行く』は、記録映画作家・亀井文夫による数少ない劇映画である。炭鉱で働く夫を爆発事故で失った女性が、やはり炭鉱で働いていくという物語で、戦時下や敗戦後の風俗、自

衛隊の発足や朝鮮戦争など、激動の時代が作品に取り込まれている。映画の終盤では、死んだはずの夫が実は生きていたことが明らかになるが、彼は“蟹工船”に乗って「北の国」に向かい、労働者の国を建設したという設定になっている。小林多喜二「蟹工船」(『戦旗』1929年5月・6月号)には不況に苦しむ北海道の炭鉱労働者が乗船しており、思わぬところでつながりが見出せる。労働者の前向きな姿勢が前面に打ち出されるこの映画のラストは、「若者よ体を鍛えておけ」(『若者よ』ぬやまひろし作詞)という労働歌の合唱で締めくくられる。

朝鮮戦争休戦後の1959年に公開された『にあんちゃん』の舞台は、佐賀県の海を臨む炭鉱の町である。すでにこの時代、石炭から石油へというエネルギー政策の転換を受けて、石炭産業は底の見えぬ労働不安を抱えていた。人々は貧困に苦しみ、町はストライキに揺れる。そんな中で炭鉱夫の父を亡くした幼い四兄妹が、それぞれに働きながら生き抜く姿が描かれている。

時代の反映と捉えればあるいは当然なのかも知れないが、1950年代後半以降の劇映画では、炭鉱は閉山や廃坑の問題と背中合わせて扱われることが多くなり、貧困や失業、そしてそれらに抵抗する手段としての労働争議とが同時に描かれることが類型化されていく。また、危険で厳しい労働環境がもたらす肉親の喪失、さらにこれに伴う家族の離散や炭鉱共同体の崩壊、故郷喪失といった設定が盛り込まれていく。『にあんちゃん』のほか、『筑豊のこどもたち』(内川清一郎監督、1960年)、『おとし穴』(勅使河原宏監督、1962年)もこうした要素を含んでいる。

『にあんちゃん』『筑豊のこどもたち』『おとし穴』は、いずれも炭鉱の幼い子供たちが主人公またはそれに準ずる重要な役割で登場する。この時期、映画は無力な子供の目を通して、もはや抗いようのない運命として石炭産業の衰退を描いているように見える。また一方で、炭鉱町を支配する虚脱感を超克し、新しい生活を切り拓いていく、その担い手として子供たちが活躍する。『にあんちゃん』の少年は、坑夫になるのではなく、東京に出て医者になる夢を語る。『筑豊のこどもたち』の少年は、大阪に出て理髪学校に入学する。『家族』(山田洋次監督、1970年)では、長崎の一家が炭坑を捨て北海道で酪農を営むことで、閉塞した現状を打開しようとする。炭坑で生き抜こうとする労働者たちの闘争を描く一方で、『女ひとり大地をゆく』などとは対照的に、炭坑を去り、新天地を求める人々の姿を、映画は描いていく。

1970年代以降も、炭鉱を舞台にした印象深い劇映画が撮られ、その中には同時代の炭鉱地帯をロケした作品もある。たとえば浦山桐郎監督の『青春の門』(浦山桐郎監督、1977年)の冒頭では、この時代の筑豊におけるある労働の風景が映し出される。それは岩盤を掘り進み石炭を発掘するといった労働ではなく、すでに閉山した炭鉱町の人々がボタ山を切り崩して、新しく道路を建設する光景である。こうして炭鉱の風景は姿を消していき、それに伴ってロケを行う映画も減少していくのである。

また、こうした流れと並行して、炭鉱労働者の具体的な労働も次第に描かれなくなっていく。たとえば先にも触れた1977年公開の『幸せの黄色ハンカチ』では、北海道の炭坑住宅のほか、回想場面で坑内事故の様子も再現されている。そこでは坑口から煤だらけの姿で出てくる男たちや、彼らを迎える女たちの表情もクローズアップされる。しかし、地下で何が起きていたのか、そこで彼らがどのような労働に従事していたかは明示されない。

一方で炭鉱は、ヤクザ映画やアクション映画、冒険映画や怪獣映画、さらにはホラー映画の舞台として好んで使われるようになり、土地の人々の生活とは必ずしも結びつかない形で流通

するようになっていく。近年では『着信アリ2』（塚本連平監督、2005年）で、台湾の炭鉱が舞台となった。90年前に炭鉱で生き埋めにされた少女の呪いが伝染していくという設定で、暗闇に対する動物的な恐怖や、落盤事故の表象と捉えることも可能であろう。しかし、その地底が労働空間であった歴史が顧みられることはない。閉ざされた空間は、一酸化炭素中毒や落盤、ガス爆発、炭塵事故、出水といった危険の表象としてのみ利用され、閉鎖的で危険であるが故に育まれた労働者の連帯感や労働の喜びは捨象されてしまうのである。

1990年代以降になると、炭鉱を脱歴史化する傾向は加速し、先述の『フラガール』や『リトル・ダンサー』『フル・モンティ』『プラス!』といった映画では、炭坑は“人々が希望を喪失した状態”を象徴的に表現する装置にすらなっていく⁸⁾。『にあんちゃん』が医者にあこがれたのに対し、『フラガール』はフラダンス、『リトル・ダンサー』はバレエ、『フル・モンティ』はストリップ、『プラス!』はプラスバンドという、必ずしも労働と直結しない種類の身体表現や音楽に主人公が夢中になるという共通点が指摘できる。

それにしてもなぜ踊りと音楽なのか。炭坑節や労働歌など、炭鉱での労働や生活と音楽の結びつきが、閉山後の新たな連帯の要になったと考えることはできる。しかし、たとえば『フラガール』などは、むしろそれまでの炭坑から飛躍し、断絶を志向しているようにも見える。フラダンスの身体所作は、炭坑やそこでの労働からあまりにかけ離れたものであり、だからこそ地元住民の反発を買うと同時に、裏返しにあこがれを生み出したのではないだろうか。むろん、まっすぐに伸びた背筋からのびやかに上げられる腕は、未来を切り拓く動作である。だがそれは同時に、過去を塗り潰す側面を併せ持つ。

身体や物体の運動によって炭坑からの飛躍を表現するという点で、『リトル・ダンサー』は鮮烈である。この映画の舞台は、ストライキに揺れるイギリス北部の炭鉱町である。炭鉱労働者である父親は、バレエに夢中になった息子をロンドンの学校に入学させてやるため、スト破りを決意する。やがて組合運動は敗北し、坑夫たちは就労のためリフトで地下へと降りて行く。そのあと物語は十数年後に飛び、父親たち家族が息子の舞台を鑑賞しに来るラストシーンを迎える。舞台の上で、息子は見事な跳躍を見せる。『フラガール』や『フル・モンティ』と同じ、ダンスをモチーフとしながら、リトル・ダンサーは群れから飛び出し、たった一人で重力に逆らって跳躍する。一方で、父親たち坑夫の姿は暗闇へと消えていく。就労するための地底への下降と舞台での跳躍が対照的に描かれ、経済的援助という形での父子の紐帯は保たれつつも、炭鉱労働やかつての共同体を後にして軽やかに飛躍する次世代の若者の姿が鮮やかに提示されるのである。地底から天上への飛躍というモチーフは、『天空の城ラピュタ』や『にあんちゃん』にも見られる。前者は飛行石という不思議な石に導かれて空を冒険し、後者はボタ山の頂上（あるいはその向こうに広がる空）に向けて歩き出すシーンで幕を閉じる。未来のない「負の遺産」とされた炭坑は、フィクションの中でこうして置き去りにされていったのである。

3. 中小炭鉱からの“声”

熊谷監督の『三池』は、終焉を告げられた炭坑の声に、今一度耳を澄ませようとする映画である。ドキュメンタリーゆえに、撮影時において実際に存在するものだけを記録しているにも

関わらず、それらを通してこれまで不可視化されてきたものや、すでに失われてしまったものにまで想像力を向ける装置が随所に仕込まれている。当事者の証言（声）はもちろんのこと、その肉体や表情にも刻まれた歴史、炭鉱という場そのものに刻印された様々な痕跡から、炭鉱の記録とイメージが紡ぎ上げられる。それは閉山ラッシュ以後の歴史と映画が捨象してきた炭鉱労働の喜びや誇りを、甦らせて見せるものであった⁹⁾。

ところで、炭鉱からの声は一定方向から聞こえてくる単一のものではない。『三池』は様々な立場からの声に丹念に耳を傾けている。一方で、より深く小さな場所から乱反射するように響いてくるかすかな声がある。

ここでは、『三池』に登場する人々が直面した採炭地における激動の時代に作られた劇映画として、1962年公開の『おとし穴』を取り上げたい。この作品を演出した勅使河原宏監督は、亀井文夫に師事したドキュメンタリー作家でもある。物語は1960年頃の三池争議を背景としており、組合の分裂や、暴力団による組合員の殺害を想起させる事件も織り込まれている。大手の炭坑が労使闘争に沸くなか、炭坑から炭坑へと密かに渡り歩く坑夫たちがいたが、『おとし穴』の主人公はそうした名もない渡り坑夫の一人である。坑夫は、共に炭鉱からケツ割り（逃亡）してきた仲間と、次のような会話を交わす。

Aの声「……こげして逃げ出して来たばって、行きつくところは、いづれ又ヤマじゃろなァ……」

Bの声「……そうたい、前よりひでえ、地獄山たい……針つきのエサだちゅうくれえ、百も承知しちよって——千円ぼっちの肩入金にパクッと食いついち——だんだん深い奈落ン底に、きりもみや……きりもみやのう……」¹⁰⁾。

会話する坑夫の顔にオーバーラップする形で、次々と記録映像が重ねられる。

ボタを満載したトロッコ、走って来て、ボタを落す。転がり落ちるボタ——。／ランプのあかりで石炭をほる男。／黙々と掘る男の姿。／坑口へ入ってくるトロッコ。／掘った土塊を竹カゴに入れる。／栄養失調で異様に腹のふくれた子供。／炭住の前にぼんやり坐っている少年。荒れ果てた炭住の中——台所で洗い物する男。／落盤事故による死体。／死体のアップ。／怪我人を運ぶ人々。／泣く家族。／チロチロと、鬼火のようにもえる火の見えるボタ山¹¹⁾。



『おとし穴』 ©財団法人草月会

ボタ山から地底へと、坑夫の思考は沈降していく。過酷な労働風景や、子どもら弱者に襲いかかる貧困と饑餓、そして悲劇的な事故と奪われゆく人命が提示される。坑夫の記憶と判断できるこうした状況を背景にしながら彼らが語る話題は、わずかな肩入金（先借金）で中小炭坑——“地獄山”——に雇われ、熾烈な労働現場から命からがら逃亡したものの、再びそうしたヤマで働くしかない絶望的な生活を呪うものである。

ここでは、連続的にモンタージュされる映像の中に、具体的な労働が捉えられていることに注目したい。熟練した所作で岩盤を掘り崩す坑夫の姿。地上では「掘る」という言葉はせいぜい土や砂利に対して鍬やスコップで働きかける動作であるが、ここでの「掘る」は鉄の重量をもって岩盤を打ち崩す労働である。

ドキュメンタリー映画『炭坑』（伊東壽恵男・柳澤壽男監督、1947年）でも、地底での労働場面が示される。『おとし穴』より15年先行するにも関わらず、そこに見られるのは、電動のコールピックやコールカッターによる採炭作業と、電動ベルトコンベアによる運炭である。大手炭坑では、第一次世界大戦の頃からこうした電動器具が使用されていた——それでも切羽（坑道の先端）を掘削する坑夫の一部を除き、防塵マスクすら着用していない労働者がほとんどであり、やがて塵肺病や失明といった深刻な後遺症が問題化されることになる——しかし、中小零細炭坑では第二次世界大戦後も手掘りでの採炭が続けられていく。『おとし穴』の坑夫による回想映像（記録映像）でも、ツルハシによる掘削と、籠を背負っての人力による運炭が行われている。具体的な労働手段ひとつとっても、炭坑によって大きな開きがあったことが分かる。

現実の炭坑史においても、炭坑の映画史においても、三池争議は決定的な事件であった。その渦中に製作された『おとし穴』は、労働組合に加わることも叶わない渡り坑夫に、極めて意識的に焦点を絞っている。肩入れ金によって奴隷労働を強いられ、夜逃げを繰り返す内に、零細炭坑のさらに下層へと追われてゆく坑夫たちの姿は、労働作家・上野英信のルポルタージュにも描かれたものである¹²⁾。『おとし穴』では、主人公の渡り坑夫は、資本家側が仕向けたと思われる謎の殺し屋によって命を奪われてしまう。しかし、殺された坑夫は、幽霊の姿でスクリー

ン上にとどまる。観客は幽霊と共に、事件の真相を求めて走り回るが、最後まで事件の全貌は明らかにされない。「わけが分らんじゃったら、死んでん死に切れん！¹³⁾」という幽霊の声は、生きた人間の耳には届かず、ボタ山の風景にむなしく吸い込まれていく。坑夫の声は、労働組合を分裂させるための策略から奪われてしまうのである。英雄的な闘争のかたわら、労働者による連帯からも外れたところで、危険な零細炭坑の奥底に葬られた無数の渡り坑夫たち。『おとし穴』は、まだ各地に炭坑があった時代に早くも忘れ去られようとしていた、彼らの声に耳を澄ませた映画だったのではないだろうか。炭坑での労働を、そして大規模な労働争議を誇りに思う人々にとって、渡り坑夫たちもまた、当時においてすでに「負の遺産」と位置づけられてはいなかっただろうか¹⁴⁾。

『三池』に登場した人々と、同じ時代、同じ場所にいながら、団結することのなかった坑夫たち。彼らが出会い、肩を組む契機はなぜ奪われてしまったのかを問うて、『三池』へのひとつの応答としたい。

付記

本稿は「上映会&シンポジウム『三池 終わらない炭鉱の物語』」第Ⅲ部での研究報告に加筆し論文化したものである。

注

- 1) 朝日新聞社の内部資料によると、「炭坑夫」は「炭鉱労働者・坑内員」と言い換えるよう定められている（『取り決め集』朝日新聞社、1998年4月、pp.145-146）。その理由は、「肉体を酷使したり、危険を伴ったりする職業は、しばしば「程度の低い」仕事と見なされるため」とされており、ほかに「掃除夫・土方・踏切番・屠殺」などの職名が挙げられている。高木正幸『差別用語の基礎知識 何が差別語・差別表現か？』（土曜美術社出版、1996年6月、p.284）には、同じく『取り決め集』の1994年版が引用されており、やはり「炭坑夫」が言い換え対象語に挙げられていることから、遅くとも90年代前半には「炭坑夫」という言葉がマスコミ報道から抹消されていたことが分かる。
- 2) 2009年夏には、ロック・ユニットB'zのミュージックビデオとディスクジャケットが“軍艦島”（旧日本海軍戦艦・土佐の外観と似ていることから付いた通称で、正式名称は端島）で撮影されたことが話題になった。海底炭鉱をもつ軍艦島は1974年に閉山されたが、2009年に世界遺産の暫定リストに挙げられ、同年4月からは一部区域への陸上が許可されるようになった。なお、軍艦島はいわゆる“廃墟ブーム”で注目を集めた近代化遺産の代表格でもある。
- 3) 「熊谷博子監督インタビュー」（町野民編『三池 終わらない炭鉱の物語』シグロ、2006年4月、p.6）。
- 4) 平成22年度における日本の石炭火力発電電力量は1,650億kWhで、全発電電力量に占める割合は15%程度となる見通しである。（平成6年6月23日「電機事業審議会受給部会中間報告」による見通し。電気事業講座編集委員会編『電気事業講座 第11巻 電気事業と燃料』電力新報社、1996年12月、p.207）
- 5) たとえば岩本憲児・高村倉太郎監修『世界映画大事典』（日本図書センター、2008年6月）のような大型事典、佐藤忠男『増補版日本映画史』（岩波書店、2006年10月～、全4巻）、『講座日本映画』（岩波書店、1985年10月～、全7巻）、田中純一郎『日本映画発達史』（中央公論社、1975年12月～、全5巻）などの大著でも、「炭鉱映画」という枠組みの設定は見られない。
- 6) 2009年6月15日時点での「炭鉱映画」「炭坑映画」の検索結果数合計。その後飛躍的に増加し、2010年4月15日時点で約44,000件がヒットするまでになった。
- 7) 叶精二『宮崎駿全書』フィルムアート、2006年3月、p.79。『天空の城ラピュタ』の炭鉱街に貼られ

た労働運動ポスターに着目した論に、井上静『宮崎駿 映像と思想の錬金術師』（社会批評社、2004年11月、pp.142-145）。

- 8) 一方で、たとえば『日本女侠传 血斗乱れ花』（山下耕作監督、1971年）では、炭層を探し当てて“石炭王”になるという、文字通り“一山当てる”夢が描かれている。ただし、その夢は落盤事故による死によって儚く消え去る。
- 9) 近年の劇映画でも、炭鉱ともう一度向き合おうとする作品が出て来ている。本稿執筆時では未見だが、2010年公開予定の『海炭市叙景』（熊切和嘉監督）、『信さん』（平山秀幸監督）もそうした動向を促す作品と見られる。
- 10) 安部公房「シナリオ「おとし穴」」（『アートシアター』第3号、1962年6月）。
- 11) 前掲「シナリオ「おとし穴」」。／は改行を指す。なお、『おとし穴』の前年にこうした厳しい労働と生活を描いた記録映画『炭鉱 政策転換の戦い』（徳永瑞夫、1961年）が製作されたが、こちらは組合活動の重要性を訴えたプロパガンダ的な要素が大きく、安部公房・勅使河原宏との状況認識の差異が伺える。
- 12) 上野英信『追われゆく坑夫たち』（岩波書店、1960年8月）など。
- 13) 前掲「シナリオ「おとし穴」」。
- 14) 勅使河原宏監督『おとし穴』における炭鉱と歴史と映像の関連を考察した拙稿「『歴史的記録と幻想的虚構の狭間から—安部公房／勅使河原宏映画「おとし穴」論—」（『立命館文学』立命館大学人文学会、第600号、2007年3月）も参照願いたい。

【炭鉱映画史略年表・作品リスト】

次頁から掲げる表は、2009年6月19日に立命館大学衣笠キャンパス創思館カンファレンスルームで開催されたシンポジウム会場で配布した資料に、その後の調査を加えた改訂版である。作品リストに挙げたのは、炭鉱をはじめとした諸鉱山が舞台になっている映画、炭鉱労働者や石炭が登場する映画、または直接登場しないがそれらを重要な背景としている映画である。フィクション、ノン・フィクションを問わずに取り上げた。『 』はタイトル、（ ）は監督・演出者名を指す。ただし、監督・演出者名が判明しなかったものについては製作会社などを記載し、それも明らかにできなかったものは空欄とした。シリーズものを除き、日本映画、外国映画の順に、それぞれ五十音順に表記し、外国映画には製作国を付記した。また、作品リストおよび三池炭坑での主なできごとは、太字で表示した。

なお、2009年11月4日から同年12月27日まで目黒区美術館にて、「『文化』資源としての〈炭鉱〉展 〈ヤマ〉の美術・写真・グラフィック・映画」が開催され、充実したカタログ『『文化』資源としての〈炭鉱〉展 〈ヤマ〉の美術・写真・グラフィック・映画』（正木基・石崎尚編著、目黒区美術館、2009年11月）が発行された。本書には石川翔平（ポレポレ東中野）編の「『日本における炭鉱関連映像作品』作品リスト」が収録されており、テレビやオリジナルビデオ作品も網羅されているため、これらについては拙稿から省略した。また、追加調査において石川氏作成のリストを参照したことを明記しておきたい。

製作国名一覧：愛＝アイルランド、米＝アメリカ、英＝イギリス、伊＝イタリア、印＝インド、豪＝オーストラリア、加＝カナダ、韓＝韓国、ス＝スウェーデン、ソ＝ソ連、中＝中国、丁＝デンマーク、独＝ドイツ、新＝ニュージーランド、洪＝ハンガリー、仏＝フランス、白＝ベルギー、波＝ポーランド、無印＝日本

【炭鉱映画史略年表・作品リスト】

西暦	炭鉱関連映画	国内石炭鉱業・石炭政策・三池炭鉱での主なできごと 三池郡稲荷山にて伝治左衛門が燃える石（石炭）を発見。	一般的な歴史事項
室町	1469		
江戸	1721頃	平野山で石炭を掘り始める。	
	1853	三池藩、生山を開坑。	ペリー来航。
明治	1857	大浦坑開坑。	
	1869	長崎の三菱高島炭鉱で英国人技師による採炭開始（日本初の洋式炭鉱）。	
	1871	三池藩土族石炭採掘を願い出る。三池藩は三池県となる。	廃藩置県。
	1872	明治政府、炭坑を国有化。	新橋－横浜間に鉄道が開通。
	1873	三池炭鉱が明治政府の官営炭鉱となる。初めて囚人を使役。	
	1876	三山立坑操業。三池物産会社設立。政府は三池炭の中国での販売を三井物産に委託、三井物産上海支店を設置。	
	1883	七浦坑操業。三池集治監設置。	
	1888	宮浦坑操業。	
	1889	官営三池炭鉱を三井に払い下げ、三井三池炭鉱となる。同隊磨が事務長に就任。	大日本帝国憲法公布。
	1894	勝立坑開坑。七浦に火力発電所設立。	日清戦争始まる。
	1895	八幡製鉄所設立。石炭の国内需要が輸出を上回る。	リュウ・エミール兄弟がシネマトグラフの有料試写会開催。
	1897	宮原坑操業。	大阪・横浜でシネマトグラフ初上映。
	1898	筑豊国炭鉱でガス爆発、死者200名余。与論島から三池炭鉱への集団移住始まる。	
	1899	万田第一坑操業。三池築港工事開始。	
	1902	全国年間出炭1,000万トンを突破。	
1903	三池専用鉄道万田－四山間開通。	初の映画常設館浅草電気館開館。	
1904		日露戦争開戦。	
1905		ボースマス条約調印、日比谷焼き討ち事件。	
1906		南満州鉄道株式会社設立。	
1908			
大正	1913	三池開港。万田坑坑内電車を使用。採運炭夫に8時間勤務3交代制を実施。	第一次世界大戦勃発。
	1914	三池ガス発電所が運転開始。	
	1915	石炭坑爆発取締規則制定。	
	1918	三池焦煤工場築土工（コンビナートの形が整う）。	シベリヤ出兵、米騒動。
	1919	全国年間出炭3,000万トンを突破。	朝鮮で三・一独立運動、中国で五・四運動。
	1920		国際連盟成立。
	1923	四山坑操業。	関東大震災。
	1924	三池で大争議。1,500人が3割の賃上げを要求しストライキ。	
	1925	「黄金狂時代」（チャールズ・チャップリン）米商工省・燃料局設置。	普通選挙法成立、治安維持法制定。

日本の炭鉱映画史と三池 (友田)

昭和	1927	「黄金の世界へ」(クラレンス・ブラウン) 米 「炭坑」(レジナルド・バーカー) 米	「くろろだいや新聞」創刊。	金礦恐慌。 第一回男子普通選挙実施。三・一五事件。 治安維持法改定、特高警察発足。
	1928	「ダイナマイト」(セシル・B・デミル) 米	三池、坑内請負制度と女子の入坑を禁止、四人の採炭作業を廃止、坑内での馬の使用禁止。	世界大恐慌。 金輸出解禁。
	1929	「炭坑 (KAMERADSCHAFT)」(ゲオルグ・W・バースト) 独・仏	三井合名会社理事長團琢磨暗殺。	満州事変。
	1930	「汽車の発達」(青地忠三) 「ルンペン紳士」(アルフレッド・E・グリーン) 米 「常磐炭礦株式会社」(常磐炭礦株式会社) 「採炭」(イヴエンス) 白	三池集治監→三池監獄 閉庁、宮原坑閉坑。	満州国建国宣言。 大日本国防婦人会結成。 国際連盟脱退。国家総動員法成立。
	1931	「ボリナージュ」(ヨリス・イヴェンス) 白	宮浦坑と四山坑でベルトコンベアが使用される。	内務省、映画統制委員会を設置。 ベルリンで世界最初のテレビ放送。
	1932	「冤獄二重奏」(W・S・ヴァン・ダイク) 米 「石炭の顔」(アルベルト・カヴァルカンディ) 英		二・二六事件。 メーデー禁止。
	1933	「躍進夕張」(北炭)		日中戦争開戦。日独伊三国防共協定。南京大虐殺。
	1934	「石の村」(京極高英)	全国年間出炭5,000万トンを突破。朝鮮人労働者の強制移入開始。 全国年間出炭5,600万トンを突破(戦前最高)。三川坑操業。 石炭配給統制法施行。	第二次世界大戦開戦。映画法施行、検閲強化。
	1935	「機関車C57」(今泉善珠) 「わが谷は緑なりき」(ジョン・フォード) 米		米、対日石油輸出全面禁止。 太平洋戦争勃発。
	1936	「男性都市」(ルイス・サイラー) 米 「サラトガ本報」(サム・ウッド) 米	三川坑で戦時捕虜(欧米人)を使役。軍需省・燃料局設置。	ミッドウェー海戦大敗。
	1937	「荒流」(家城巳代治) 「愛の物語」(レスリー・アーリス) 英	強制連行の中国人朝鮮人を使役(三川、四山、万田、宮浦坑)。 全国炭鉱在籍労働者数40万人を突破(炭鉱史上最高)。 B29本土初空襲(北九州襲撃)。	アッツ島玉砕。
	1938	「小麦は緑」(アーヴィング・ラバー) 米		
	1939	「刺刀の刃」(エドモンド・グールディング) 米		
	1940	「炭坑」(伊藤忠彦男・柳澤諱男) 「狂乱の狼火」(フレイア・デズモンド・ハースト) 英	大牟田で空襲。三池炭鉱労働組合結成。 敗戦とともに中国人・朝鮮人労働者の闘争が各地で発生。 商工省・石炭庁設置。「石炭委員会」発足。 「傾斜生産方式」と「石炭補給金」開始。	沖繩戦、東京大空襲、広島・長崎に原爆投下。 終戦。財閥解体。農地改革。 日本国憲法公布。 天皇人間宣言。
	1941	「一週でも多く」(経済安定本部) 「崎の男」(佐々木康) 「緑なき島」(小坂哲人) 「コロラド」(ヘンリー・レビン) 米 「無法者の窟」(ビエトロ・ジェルミ) 伊 「若き親衛隊」(セルゲイ・ゲラシモフ) ソ	臨時石炭鉱業管理法公布(1950年廃止)。 日本炭鉱労働者同盟(炭労)結成。 臨時石炭鉱業管理法施行。	
	1942	「酸熱ホテル」(倉田文人) 「どぶろくの辰」(田坂具隆)	石炭各社、自主販売体制に。	東宝争議始まる。
	1943			
	1944			
	1945			
	1946			
	1947			
	1948			
	1949			
	1950			
	1951			
	1952			
	1953			
	1954			
	1955			
	1956			
	1957			
	1958			
	1959			
	1960			
	1961			
	1962			
	1963			
	1964			
	1965			
	1966			
	1967			
	1968			
	1969			
	1970			
	1971			
	1972			
	1973			
	1974			
	1975			
	1976			
	1977			
	1978			
	1979			
	1980			
	1981			
	1982			
	1983			
	1984			
	1985			
	1986			
	1987			
	1988			
	1989			
	1990			
	1991			
	1992			
	1993			
	1994			
	1995			
	1996			
	1997			
	1998			
	1999			
	2000			
	2001			
	2002			
	2003			
	2004			
	2005			
	2006			
	2007			
	2008			
	2009			
	2010			
	2011			
	2012			
	2013			
	2014			
	2015			
	2016			
	2017			
	2018			
	2019			
	2020			
	2021			
	2022			
	2023			
	2024			
	2025			

1950	『炭鉱の人々』 『鉄道電化』(豊田敬太) 『住友の石炭』	三井鉱山で約2万人が希望退職。 原油輸入開始、石炭から石油へ工場設備が急転。 人工島(初島)ができる。 アメリカ炭の輸入が始まる。 通商産業省・石炭局設置。国内の炭坑数が史上最大の1,047に。 臨時石炭鉱山法(2002年廃止)。日本炭鉱主協協議会結成。 炭労賃上げを要求し63日スト。朝鮮特需による石炭不足で国内産炭は重油転換と海外炭輸入へ。	朝鮮戦争勃発。 各映画会社レックトバージョンを実施。 サンフランシスコ講和会議開催、講和条約締結、日米安全保障条約締結。 メーデー事件。
1951	『女といふ嘘 夕子の巻』(阿部豊) 『女ひとり大地を行く』(亀井文夫) 『蟹工船』(山村聡) 『新婚のちげ節』(田中重雄) 『炭部夕張』 『裸の拍車』(アンソニー・マン) 米	第二人工島(港沖人工島)ができる。三池炭協協賛結成。 三池労組が「英雄無き113日の戦い」で解雇撤回を勝ち取る。 通産省石炭局による「立坑閉削5カ年計画」開始。	NHKがテレビ放送開始。 奄美群島が本土復帰。
1952	『世代』(アンジェイ・ワイタ) 波	石炭過剰で貯炭700万トン。九州の休廃鉱141、3万人が失業。	米水爆実験、第五福竜丸被曝。
1953	『生きとし生けるもの』(西河克己) 『浮草日記 市川馬五郎一座顔末記』(山本薩夫) 『かんかん虫は眠う』(三隅研次) 『珠はくだけず』(田中重雄) 『緑なき島』	石炭鉱業合理化臨時措置法(スクラップアンドビルド政策、2002年廃止)、非能率炭鉱の買上げ、標準炭価制度導入、石炭鉱業審議会 会の設置。	原子力基本法成立。 原水禁第一回大会開催。 砂川基地闘争開始。
1954	『せんぷりせんじが笑った!』(日本炭鉱労働組合) 『空の大怪獣 ラドロン』(本多猪四郎) 『際』(イェジー・カワレロウイチ) 波 『誇りと冒険』(ジョージ・シムートン) 米 『炎の八ッ橋』(グインセント・ミニネリ) 米	大牟田市で産業科学大博覧会が開催。	原子力委員会発足。 結核白書「もはや戦後ではない」。 日ソ共同宣言調印、日ソ国交回復。
1955	『暗黒街の美女』(翁木清順) 『命も恋も』(小杉勇) 『狂った関係』(野口博志) 『大学の石松 女群突破』(小石栄一) 『どたんば』(内田吐夢) 『煤煙の街の子どもたち』(豊田敬太)		ソ連スプートニク一号打ち上げ。
1956	『オモ子と少年』(森園忠) 『黒い炎』(西村元男) 『この天の虹』(木下恵介) 『女侠一代』(内川清一郎) 『太陽をぶち壊せ』(野口博志) 『炭坑の子』 『大樹のうた』(サタジツ・レイ) 印		アラビア石油設立。
1957	『失業一炭鉱合理化との斗争』(京極高英) 『にあんちゃん』(今村昌平) 『人間の壁』(山本薩夫) 『母子草』(山村聡) 『追いつめられて……』(J・リー・トンプソン) 英 『やるか、くたばるか』(ジヨルジュ・ロートネル) 仏	三池鉱山大合理化案提示、三池労組員1,492名に指名退職勧告 炭鉱労働者等の雇用の安定等に関する臨時措置法(2002年廃止)。 石炭産業に「斜陽産業」のレッテル。	ミッチャーブームがテレビの普及に拍車。 キューバ革命。

日本の炭鉱映画史と三池 (友田)

1960	<p>「大いなる慕恋」(岡川秀雄) 「嫌い嫌い」(枝川弘) 「口笛が流れる港町」(齋藤武市) 「立坑」(松岡新也) 「箕野のこどもたち」(内川清一郎) 「三池一たまたかう仲間」(徳永端夫) 「ふたりの女」(ヴィットリオ・デ・シーカ) 「息子と恋人」(ジャック・カーティエ) 米</p>	<p>三池三池争議が10ヶ月続く。三池新労組結成。 石炭鉱業合理化事業団発足。</p>	<p>日米安全保障条約の改定、安保闘争、樺美智子死亡。 日本社会党委員長浅沼稻次郎、右翼少年に刺殺される。 夫島若「日本の夜と霧」上映打ち切り。 風流夢遊事件。 池田内閣、「所得倍増計画」発表。 カラテレレビ本放送開始。</p>
1961	<p>「追跡」(西河克己) 「不敵なる脱出」(相野田悟) 「炭鉱一政策転換の戦い」(徳永端夫) 「若い狼」(恩地日出夫) 「わが生涯は火の如く」(関川秀雄) 「孤り恋の女」(ルチアーノ・エンメル) 仏・伊 「孤独の報酬」(リンゼイ・アンダーソン) 英</p>	<p>国内出炭量 5540 万トン (戦後のピーク)。 産炭地域振興臨時措置法 (2001 年失効)。 衆議院石炭特別委員会設置。 一次エネルギー供給に占めるシェア、石油が石炭を上回る。</p>	<p>農業基本法成立。国民皆保険制度発足。</p>
1962	<p>「あの橋の畔で」(野村芳太郎) 「おとし穴」(勸使河原宏)</p>	<p>政府はスクラップアンドビルド政策を「閉山方向」へ転換。 閉山の多発と大型化、炭坑離職者の増加。</p>	<p>原油の輸入自由化。 東京都、世界初の1,000万都市に。</p>
1963	<p>「ある機関助手」(土本典昭) 「温泉芸者」(富山壮吉) 「台所太平記」(豊田四郎) 「炭鉱を離れて」(東京都映画協会) 「二人で胸を張れ」(酒井欣也)</p>	<p>三川坑で炭塵爆発事故、死者 458 名、839 名が CO 中毒に。 北九州市発足。北海道全道で 25 鉱が閉山。 第一次石炭政策開始 (国内炭 5,500 万トン体制)。 石炭鉱害賠償等臨時措置法 (2002 年廃止)。</p>	<p>原水禁大会分裂。ケネディ暗殺。</p>
1964	<p>「宇宙大怪獣」(小沢茂弘) 「監獄博徒」(小沢茂弘) 「その男ソルバル」(マイケル・カコヤニス) 米</p>	<p>世界一の石炭輸入国に。</p>	<p>東海道新幹線開通。 名神高速道路開通。 東京オリンピック開催。</p>
1965	<p>「太陽が大好き」(若林光夫) 「日本旅客伝」(浪花雛) (マキノ雅弘)</p>	<p>第二次石炭政策開始。</p>	<p>日本原子力発電、営業用発電開始。ベ平連結成。 日韓基本条約。米軍北緯開始。</p>
1966	<p>「こっぽんを叱る」(シャッター0) (田村泰次郎・杉浦幸雄・藤原弘達) 「破れ証文」(田中重雄)</p>	<p>CO 中毒患者の救済を訴え家族が144時間の坑底座り込み。 第三次石炭政策開始 (国内炭 5,000 万トン体制)。 全国炭鉱在籍労働者数 10 万人を割り込む。 石炭対策特別会計創設、赤字石炭会社債務1,000億円政府肩代わり。</p>	<p>日本の人口1億人突破。 中国文化大革命。</p>
1967	<p>「愛と希望の炭鉱」(通産省) 「網走番外地 決斗零下 30 度」(石井輝男) 「血と炭の画」 「博奕打ち 不死身の勝負」(小沢茂弘) 「夜明けの国」(時枝俊江) 「よみがえる産炭地」(前田庸言) 「詩人ヨーゼフ・アッティラ少年期」(コチャ・フエレネック) 洪</p>	<p>労使間の「CO協定」調印。 大規模炭鉱の閉山相次ぐ。</p>	<p>佐藤首相、非核三原則発表。大気汚染防止法施行。 政府、水俣病を公害病として認定。 三億円事件。 キング牧師暗殺される。パリで五月革命。</p>
1968	<p>「ころつき」(マキノ雅弘) 「スクラップ集団」(田坂具隆) 「蝨虫女と弱虫男」(新藤兼人) 「白昼堂々」(野村芳太郎)</p>	<p>第四次石炭政策開始、閉山特別交付金制度創設。 全国で 61 鉱が閉山。 政府、石炭産業を構造不況産業と位置付け。</p>	<p>東大安田講堂に機動隊突入。 東名高速道路開通。 アポロ11号月面着陸。</p>
1969	<p>「炭鉱 政策転換の戦い」(徳永端夫) 「日本女侠伝 俠客芸者」(山下耕作) 「男牡丹博徒 二代目渡名」(小沢茂弘) 「男の闘い」(マーティン・リット) 米 「恋する女たち」(ケン・ラッセル) 英・米</p>		

1970	<p>【家族】(山田洋次) 念仏三段斬り(原田隆司)</p> <p>【極悪坊主】(熊井啓)</p> <p>【地の群れ】(熊井啓)</p> <p>【日本旅客伝】(山下耕作)</p> <p>【乱つき博徒】(小沢茂弘)</p> <p>【燃えよ石炭】(常磐炭礦株式会社)</p> <p>【夜遊びの帝王】(斎藤武市)</p> <p>【黒馬物語】(ジェームズ・ヒル) 英</p>	<p>第三人工島(三池島)ができる。 三池炭鉱の出炭、年間657万トンの最高記録。</p>	<p>日本万国博覧会開催。 よど号事件。 新日本製鉄設立。 三島由紀夫自衛隊に乱入し刺腹自殺。 沖縄コザ市で大規模な反米行動。</p>	
1971	<p>【あらかじめたれた恋人たちよ】(清水邦夫)</p> <p>【ころつき無宿】(降旗康男)</p> <p>【日本女侠伝 血斗乱れ花】(山下耕作)</p> <p>【ボルノの帝王】(内藤誠)</p> <p>【未亡人殺しの帝王】(内藤誠)</p> <p>【わが歌のある限り】(長谷川和夫)</p> <p>【キャノンブロー】(ロバート・アルトマン) 米</p> <p>【ジュー・ヒル】(ボニー・ヴァイデルベルイ) 米・ス</p> <p>【盲目ガンマン】(ワエルデライナント・バルデイ) 米</p>	<p>九州の炭鉱在籍労働者数1万人を割り込む。 第五次石炭政策(国内炭2,000万トン体制)。 基準炭価制度導入。 一般炭輸入開始。</p>	<p>沖縄返還協定調印。 ニクソンショック。 成田国際空港反対闘争激化。</p>	
1972	<p>【喜劇 泥棒大家族 天下を取る】(坪島孝)</p>	<p>石炭生産量が2,000万トンを下回る。</p>	<p>沖縄本土復帰。浅間山荘事件。日中国交回復。</p>	
1973	<p>【狼狩時】(中村登)</p> <p>【花と竜 青雲篇 愛憎篇 怒濤篇】(加藤泰)</p> <p>【三池監獄 兇悪犯】(小沢茂弘)</p>	<p>第六次石炭政策。石油危機で石炭作業を再評価。 北炭夕張炭鉱閉山。</p>	<p>石油需給適正化法。 第一次石油危機で石油暴騰。</p>	
1974	<p>【きかんしゃやえもん D51の大冒険】(田宮武)</p> <p>【個人生活】(ビエール・グラニエ・ドフェール) 仏</p> <p>【ゴールド】(ビーター・ハント) 英</p>	<p>高度経済成長の終焉。 原子力船むつ放射能漏れ事故。</p>	<p>高度経済成長の終焉。 原子力船むつ放射能漏れ事故。</p>	
1975	<p>【國よ、きらめく海を見たか めぐり逢い】(吉田憲二)</p> <p>【軍艦島1975—模範の国—】(今村秀夫)</p> <p>【青春の門】(浦山桐郎)</p> <p>【日本露力列島 京阪神殺しの軍団】(山下耕作)</p> <p>【三池斗争 日本をゆるがした三三日】(杉本光雄・土井高知)</p>	<p>石炭生産量が2,000万トンを下回る。</p>	<p>山陽新幹線岡山ー博多間開通。 沖縄国際海洋博覧会。</p>	
1976	<p>【怒りの山河】(ジョナサン・デミ) 米</p>	<p>第六次石炭政策。石油危機で石炭作業を再評価。 北炭夕張炭鉱閉山。</p>	<p>沖縄本土復帰。浅間山荘事件。日中国交回復。</p>	
1977	<p>【幸福の黄色いハンカチ】(山田洋次)</p>	<p>第六次石炭政策。石油危機で石炭作業を再評価。 北炭夕張炭鉱閉山。</p>	<p>第二次石油危機。日中平和友好条約。東京電力福島第二原子力発電所3号機事故(日本初の臨界事故)。</p>	
1978	<p>【見直される石炭火力】(赤池俊彦)</p> <p>【ターニアアイトター】(ジェームズ・フアーゴ) 米</p>	<p>石油代替エネルギー技術開発の推進目指しNEDO設立。 エスケケーが日本初のコールセンター操業を開始。</p>	<p>第二次石油危機。 スリニマール島原子力発電所事故。 反核10フイート映画運動募金開始。 イラン・イラク戦争勃発。</p>	
1979	<p>【新・明日に向かって撃て!】(リチャード・レスター) 米</p>	<p>石油代替エネルギー技術開発の推進目指しNEDO設立。 エスケケーが日本初のコールセンター操業を開始。</p>	<p>第二次石油危機。 スリニマール島原子力発電所事故。 反核10フイート映画運動募金開始。 イラン・イラク戦争勃発。</p>	
1980	<p>【戒厳令の夜】(山下耕作)</p> <p>【解放の日まで 在日朝鮮人の足跡】(辛基秀)</p> <p>【四季・奈津子】(東陽一)</p> <p>【純】(横山博人)</p> <p>【アレクサンダー大王】(テオ・アンゲロプロス)伊・西独・希</p> <p>【レイズ・ザ・タイタニック】(ジェリー・ジェームソン) 米</p>	<p>第七次石炭政策(2,000万トン体制維持を目指す)。 夕張新炭鉱閉山。</p>	<p>中国残留孤児が初来日。</p>	
1981	<p>【青春の門】(蔵原惟精・深作欣二)</p> <p>【冒険者カミカゼ】(鹿森立一)</p> <p>【アウトラインド】(ビーター・ハイアムズ) 米</p>			
1982	<p>【霧裂都市 パースト・シテイ】(石井聰互)</p>			

1983	『海底炭鉱に生きる—池島からの報告』(野崎健輔) 『オナカマドの挽歌』(木村元保)	有明坑で坑内火災、死者83名、CO中毒者16名。	日本中部地震。
1984	『はじけ風仙花 わが魂豊わが朝顔』(土本典昭) 『ロケーション』(森崎東)		NHK衛星放送開始。 グリコ・森永事件。
1985	『薄化粧』(五社英雄) 『銀河鉄道之夜』(杉井ギサブロー) 『ユーバロ谷のドンペニス』(熊谷勲) 『バイライター』(クリントン・イーストウッド) 米	高島炭鉱閉山。	つくば国際科学技術博覧会。 日本航空機、高天原山の御巣鷹山中に墜落。
1986	『現はつらいよ 幸福の青い鳥』(山田洋次) 『天空の城ラビュラ』(宮崎駿)		男女雇用機会均等法。 チェルノブイリ原子力発電所事故。
1987	『女吹かせます』(森崎東) 『次郎物語』(森田時久) 『モエオテアアの山猫』(山田勇男) 『メイトワシ1920』(ジョン・セイルズ) 米	三井三川鉱で希望退職を募り、3年間で1,850名削減。 第八次石炭政策(91年度までに1,000万トン規模に縮小へ)。 三井砂川炭鉱閉山。	
1988	『ウィザード』(ヴァインセント・ウォード) 新・豪 『エイリアンフロムL.A.』(アルバート・ピュン) 米 『聖なる贈り物』(エルマンノ・オルミ) 伊・仏 『旅立ちの季節』(ロン・ナイスマン) 米		青函トンネル開通。 リクルート事件。 天皇の容態報道加熱、自虐ムード拡大。
1989	『V.M.の夢想』(山崎裕夫) 『レインボウ』(ケン・ラッセル) 英	三川坑が閉鎖(労働者の入界口としての閉鎖、揚炭・機械材料搬入は継続)、有明坑へ統合。	天安門事件。 マルタ会談、東西冷戦終結。
1990	『ゴールドラッシュ』(和泉聖治) 『夢を冠に』(山田勇男) 『死の愛撫』(モート・ランセン) 英・加	鉄鋼業界による石炭引取協力が終了。 石炭生産量が1,000万トンを下回る。	バブル経済崩壊。 イラク軍、クウェート侵攻。
1991	『赤と黒の接吻』(エリック・バルビエ) 仏・白・波		ソビエト連邦解体。湾岸戦争勃発。
1992	『魚からダイオキシン』(宇崎竜童)	ポスト八次策(90年代を構造調整の最終段階と位置付け)。 三井芦別炭鉱閉山。	国連平和維持活動(PKO)協立法成立。
1993	『リング・リング・リング 涙のチャンピオンベルト』(工藤泰一) 『動くな、死ね、死ね!』(ヴィタリー・カネフスキー)ソ 『ジエミナル』(クロード・ベリ) 仏 『チャタレイ夫人の恋人』(ケン・ラッセル) 英		北海道南西沖地震。 歴代天皇初の沖縄訪問。
1994	『ア』(山崎裕夫) 『イル・ボステイーン』(マイケル・ラドフォード) 伊・仏	赤平炭坑閉山。	松本サリン事件。
1995	『三たびの海峡』(神山征二郎)	空知炭坑閉山。	
1996	『ケス』(ケン・ローチ) 英 『アラス!』(マーク・ハーマン) 英	CO協定廃止で労働者が同意。	高津増産計画もじゆ事故。阪神・淡路大震災。地下鉄サリン事件。沖縄県知事太田昌秀、代理署名拒否。
1997	『記録映画 三池』(三池炭鉱労働組合) 『ゲゲゲの鬼太郎 妖怪特急! まぼろしの汽車』(吉沢孝男) 『もののけ姫』(宮崎駿) 『ピーヌメーカー』(ミミ・レター) 米 『フル・モンテ』(ピーター・カッタネオ) 英	三井三池炭鉱閉山。	広島日本大使館公安部入質占拠事件。 ベルー島の原爆ドームが世界遺産に指定。 酒鬼薙草事件。 日米防衛新指針(新ガイドライン)決定。

平成

日本の炭鉱映画史と三池（友田）

2008	<p>「いまここにふる風景」(ジュニアファーム・バイチウウォル) 加</p> <p>「黒い土の少女」(ジョン・スミス) 韓</p> <p>「荒木栄の歌が聞こえる」(港健二郎)</p> <p>「美代子阿佐ヶ谷気分」(坪田義史)</p> <p>「愛を讀む人」(ステイブ・ファン・ダルドリー) 米・独</p> <p>「戦場のレクイエム」(フォン・シャオガン) 中</p> <p>「ブラッディ・バレンタイン」(パトリック・ルシエ) 米</p>	<p>ポレポレ東中野での特集上映「ドキメント・2003-2008」、大卒</p> <p>田文化会館等で「三池」上映。</p> <p>大卒田市三川地区公民館、ヒロシマ平和映画祭 2009、立命館大学</p> <p>等で「三池」上映。</p> <p>目黒区美術館で「文化・資源としての〈炭鉱〉展」開催、ポレポ</p> <p>レ東中野での運動企画「映像の中の炭鉱」で「三池」上映。</p>	<p>世界同時株価安、金融不安拡大。</p> <p>原油価格高騰。</p> <p>政権交代（非自民党政権樹立）。</p> <p>アメリカカ史上初の黒人大統領誕生。</p>
2010	<p>「海炭市叙景」(熊切和嘉)</p> <p>「信さん 炭坑町のセレナーデ」(平山秀幸)</p>	<p>大卒田市勝立地区公民館等で「三池」上映。</p>	